

グリム童話と『日本の昔ばなし』の比較

—お礼結婚について—

Ein Vergleich der Märchen der Brüder Grimm mit den japanischen Märchen über die Heirat zur Dankbarkeit für große Hilfe

太田伸広

要旨：お礼結婚では、父親（家）が、娘（あるいは子、グリム童話では父）の窮状、奇病、難病を救ってくれた男性に、お礼として娘を嫁としてやる構成になっている。『日本の昔ばなし』では、救助者にお礼の品物として与えられる女性に感情や意思、人格がないが、グリム童話では、女性に強烈な意志と感情、確固とした自分の考えがある。次に、お礼結婚では、娘をお礼の品物のように救助者にやるが、そうする父親に、意外にも、余り家父長的な態度が見られない。これは『日本の昔ばなし』にもグリム童話にも共通している。『日本の昔ばなし』では、主人公が、占い師や呪術師、魔術師のように、尻鳴りや長い鼻などの奇病、大病、難病を治したり、死者を蘇らせたりして、感謝され、お礼に助けた長者の娘をもらって出世する。しかも、それを神様が後押しする。これは、グリム童話ではありえないし、実際グリム童話全体を見渡してもない。ここに、独特の民俗宗教を作り上げてきた日本の文化と西欧のキリスト教文化の差が現われているのかも知れない。

はじめに

グリム童話と『日本の昔ばなし』をお礼結婚に焦点を当てて比較する。分析の対象は、グリム童話の場合は、1857年の決定版のKHM 200篇、203話で、日本の昔話の場合は、関敬吾氏編集の『日本の昔ばなし』（岩波文庫）第I、第II、第III巻の240話である。

結婚は、その種類と類型の両面から分析することにする。種類とは、恋愛結婚、難題解決結婚、魔法からの解放結婚、政略結婚、等々である。類型であるが、異なる結婚、例えば、恋愛結婚と難題解決結婚であっても、王家（殿様家）の男と王家（殿様家）の女の結婚ということでは同じ型の結婚であり、それを結婚の類型と呼ぶことにする。王家（殿様家、高貴な身分）の男と王家（殿様家、高貴な身分）の女の結婚を類型1、王家（殿様家）の男と庶民の女の結婚を類型2、庶民の男と王家（殿様家）の女の結婚を類型3、庶民同士の結婚を類型4、神と神の結婚が類型5、神と人間（女）の結婚が類型6、人間（男）と神の結婚が類型7等々とする。

お礼結婚とは、不治の病を治してもらったり、死んだ娘を生き返らせてもらったり、借金苦を助けてもらったりしたお礼に、娘をその恩人にやる結婚のことである。

『日本の昔ばなし』には、お礼結婚は6話、6組の結婚があるが、グリム童話には、1篇1組しかない。

これから、『日本の昔ばなし』とグリム童話のお礼結婚を類型別に具体的に見ていくことにする。

グリム童話のテキストは、BRÜDER GRIMM Kinder-und Hausmärchen Vollständige Ausgabe Mit 184 Illustrationen zeitgenössischer Künstler und einem Nachwort von Heinz Rölleke Artemis & Winkler 1949 Winkler Verlag, München, 19. Auflage 1999 である。参考にした訳は、金田鬼一氏の『グリム童話集』（岩波書店）である。

第1章『日本の昔ばなし』のお礼結婚

すでに述べたことであるが、『日本の昔ばなし』には、お礼結婚は6話ある。6話というと、少ないような印象を与えるかもしれないが、『日本の昔ばなし』の結婚の種類の中では非常に多い。第1位の不明の結婚（10話、10組）を除けば、第2位に位置する。ちなみに第1位は7話、7組ある一方的恋愛結婚である。『日本の昔ばなし』は、240話あるが、結婚が出てくる話は38話しかないので、6話ということは非常に多いということになる。『日本の昔ばなし』の場合、第1位の不明の結婚、第2位の一方的恋愛結婚、第3位のお礼結婚、第4位の家父長的結婚（5話8組）、第5位の押し売り結婚（4話4組）の上位の5つの種類の結婚で、32話、35組にもなり、全体（一つの話に2種類の結婚が出てきたりするので、全体は45話、49組）の約71%を占める。それに、2話ずつある父の約束結婚、無理矢理・略奪結婚、報恩結婚、恋愛結婚が続き、残りは1話ずつしかない。

第1節 類型3のお礼結婚

第1番目は『三人の兄弟』である。

「昔々、うんと昔、あるところに兄弟三人」あった。「一ばん目の兄は一郎治、二ばん目が二郎治、末子は三郎治といった」。三人が大きくなったとき、「父っつあん」が「今から三年のあいだ暇をやっから、三人で思いおもいに出世をして帰ってこう」と言い、「小判で五両ずつの金をや」った。二郎治も三郎治も「父っつあん、そんでは三年ののちには必ず出世して帰ってくっから、体ばかり気つけて丈夫でいてくれの」と言った。「一郎治ばかりは何ともいわないで」いた。

三人は「三つ辻」のところで別れ、「一郎治は右の道を、二郎治はまん中の道を、三郎治は左の道を行くことにし」た。

一郎治は、「大きな沼」のなかに、「雁が一ぱい降りてい」たので、「懐から小判を出して、ぶーんとぶちつけ」た。金が無くなったので、「道ばたのお堂のなかに入って寝」た。しばらくすると、「一郎兄、一郎兄」と呼ぶものがあるので、目を覚まして見ると、「お椀」であった。「お椀」が、兄は「銭一文も」ないんだから「己れといっしょに仕事をし」ようというので、それを「懐に入れて、町の方へ出かけてい」った。「よく寝しずまっている」「金持の家」に着くと、「猫ぐぐりの穴からお椀を家のなかへ入れ」、「お椀が中から戸をあけ」た。一郎治は、「金だの、いろいろな宝物だのを盗ん」だ。「一郎治はこうして、泥棒の名人になってしま」った。

「おとなし」い二郎治は、「心細くなって、早く人里の方へ行こうと思っ」たが、人里に着かず、夜になってしまった。「がっかりして道ばたの草の上に腰をかけてい」た。そして「家のことだの、兄弟のことだのを考えてぼんやりしていると、尻の下で『これこれ、二郎治や、二郎治や』と呼ぶものがあ」った。「びっくりして尻のしたのあたりをよく見ると、篋が一本

おちてい」た。「篋」は言う。「ここから一里ばかりはなれたとこの長者どのお姫さまが大病で、「坊主」も「山伏」も「医者」も治せず、病は日々「重く」なっている。「お姫さまの病気をなおす」のは簡単だ。「この己を裏返しにして、ちょっとお姫さまのけつをなでまわすと、けろとなおる」。「表でなでると、かえって悪くな」る。「だからな、二郎兄、己をあそこさつれて行って、お姫さまのけつをなでて見ろ」、「今日死ぬか、あす死ぬかという病気だから、今ならなでさせるで」。

二郎治は「おとなしいから、とにかくそんな大病人がなおせるならこのうえないことだと思って」、「篋を懐に入れて長者どのお家へいき」、「お姫さまの病気をなおして上げますという」と、「すぐにたのまれ」た。「二郎治はしばらく人ばらいをして、お姫さまの廻りに屏風をたてかけ」、「懐から篋を出して、お姫さまのけつをそろとなで」と、「けろりと治ってしま」った。「長者の家ではたいそう喜んで、二郎治をお姫さまの命の親だといって、下にもおかないようにもてなし」た。「それからとうとう、お姫さまの婿にし」た。

三郎治が行ったところは「山ばかりで、そのうちに日も暮れてしまった」ので、「松の木の下の」で「休んでいると」、「遠くの方で草をかさがさとなびかせ」、「大蛇がぐでんぐでんとひっくり返りながらやって来」た。「こりゃ大変だと思って」、木にのぼると、大蛇も登ってきた。三郎治が「ぶるぶるふるえてい」と、「帯がゆるんで、懐に入れておいた錢が」、「大蛇の口の中へ、ぼたん^{だいじん}と落ちた。」「さすがの大蛇も喉がつまって、ぐるりと下の方へ落ちてしま」った。「そこを殿さまがたくさんの家来をつれて通りかか」った。「大蛇が苦しんでいるのを見て『これはえらい、今までこの大蛇のために、何人の人が難儀をしたかわからない、いまこの大蛇を退治に来たんだ。お前が退治してくれて助かった。さあ、わしのところに来るがよい』」と、三郎治をつれて「帰り、「悪者を退治する（侍の）役目をおおせつ」けた。

さて「三年目の秋がやって来」た。

一郎治は、盗んだ「金はみんな貧乏人にくれてやっ」たので、一文無しであった。さて故郷へ帰ろうというだんになると、何もないので、「お父っつあん」の「土産」に「何かひと盗み」しようと思立った。

二郎治は、「五百両の土産の金をとりそろえて、故郷へ帰る日をまっいてい」た。

三郎治の方では、「明日は故郷へ旅立つという日に」、「長者の家から五百両の大金が、ゆうべ盗人にぬすまれたという訴えがあ」った。「泥棒」をつかまえてみると、「一郎治」であり、訴人は「二郎治」であった。「兄弟は胸がつまって泣いてしま」った。

さて、ここの二郎治とお姫さまの結婚であるが、長者の家では、「篋」でお姫さまの難病をなおした二郎治を「命の親」だと言って、感謝し、「お姫さまの婿にし」たのであるから、この結婚は、典型的なお礼結婚である。ただし、お礼に娘を嫁にやったのは、家である。恐らく、それを決めたのは家長の父親であろうが、その様な叙述はない。

二郎治は（長者の）お姫さまにどのような気持ちを抱いていたのであろうか。二郎治は、お姫さまの病気を治しに、長者の家に行ったが、この場合、お姫さまの病気を治した者にはお姫様を嫁にやるという取り決めがあったわけでもなく、したがって、またそのような立て札もなかった。だから、二郎治は、お姫さまとの結婚を意図して、長者の家に出かけて行ったのではない。「おとなしく」「気立てのいい」二郎治は、「とにかくそんな大病人がなおせるならこのうえないことだと思って」行ったのである。お姫さまの病気を治しに行けと言った「篋」の方もしゃれている。「いつもならお姫さまのけつなど、なかなかなでられるもんでねえが、今日

死ぬか、あす死ぬかという病気だから、今ならなでさせるで」と「窺」は言い、お姫さまをもらえるなどとは、一言も言っていない。二郎治のこのような行為の結果として、彼は婿になったのであり、長者の方からすれば「お礼」として「婿にし」たのである。二郎治のお姫さまに対する気持ちは、結婚前はもちろんのこと、結婚後も語られていないので分からない。

お姫さまの方は、登場人物としても、感情や人格の面でも、ほとんどその存在を感じさせない。病気を治してもらったときも、彼女の喜びや感情は、一切表に出ない。結婚後も、妻、お姫さまという言葉すら出てこない。お姫さまは、文字通り、感謝の印、お礼の品物である。

結婚後、婿の二郎治は「金に不自由はない」し、「誰からもありがたがられて」おり、とても幸せそうに見えるが、妻の方は結婚生活が幸か不幸か不明である。したがって、二人の結婚生活も、幸福なのか不幸なのか不明である。

この長者の家では、家父も家母も登場しない。単に「長者の家」が「喜んで」いるだけである。したがって、父親が家父長的だと言うには判断材料が不足している。しかし「長者の家ではたいそう喜んで、二郎治をお姫さまの命の親だといって、下にもおかないようにもてなしました。それからとうとう、お姫さまの婿にしました」という表現になっているので、二郎治とお姫様の結婚を決定しているのは家の意志、家の利害であり、娘の意思でないことだけは、はっきりしている。

この『三人兄弟』では、お姫さまの美しさは一切語られていない。お姫さまと結婚した二郎治の方も美しさにひかれて、病気を治そうとしたのでもなく、また、お姫様をもらおうとして病気を治そうとしたのでもない。

二郎治がお姫様を嫁にもらうことになった行為、理由は、難病の治療である。この治療には、異次元の世界からの贈物の「窺」が決定的な役割を演じている。人間（例えば医者、坊主、山伏）にとってはどうにもならない、いかんともしがたい病気を「窺」はいとも簡単に治す。しかも、物も言う。ついでながら、泥棒になった二郎治も異次元の世界からの贈物の「お椀」を使って、泥棒の名人になっている。

第2番目は『聴き耳』である。

「あるとき、一人の男が海岸のそばを通りかか」った。すると浅瀬のところに、小さな鯛が大きな魚に追われて来て、ばたばたして苦しんでいた。『お前は、そんなところにいる欲の深い人に見つかったら料理されるよ。深いところに逃がしてやるから、早く島（村）に逃げていけよ』とあって、鯛を逃がしてや」った。

まもなく、「後の方から、神さまじゃないかと思われるほどうつくしい女が『もしもし、ちょっと待って下さい』と呼びとめ」た。「人ちがいだろう」と思っていたが、もう一度呼ぶので「『おれかい』とたずねると、『そうです。わたしはねりや（竜宮）の王さまの使いで来ました。さっきねりやの一人娘が、命のあぶないところを、あなたに助けていただいたので、おつれして来いといわれました。どうかいっしょに来て下さい』と」い」った。

「二人で海辺に行くと、女は大きなくらげにな」った。くらげは、男を「背中にのせて行きながら『王さまが何かすきなものがないかとおっしゃったら、…あの床の上にかざってある聴き耳が欲しいと、そういいなさい。…一人娘の恩人だから、ねりやに一つしかない宝物だけれども、きっとあなたに下さいますよ』と、教えてくれ」た。

ねりやで、女の言ったとおりに言い、「聴き耳」をもらい、「またくらげの背中に乗って、送られて帰」って来た。

「向こうの方で、雀がちゅうちゅう鳴いてい」た。「聴き耳」を「耳にあて」と、「おれたちがとまっている木の下の細い川のまんなかに石が一つあるが、…その石が黄金だということはちょっとも知らないからね」と言っていた。不思議に思って、「川にいった」「石をとって苔を洗い落して見ると」、「ぴかぴか光る黄金の塊で」あった。

今度は「松の木の上で鳥がかあかあ鳴いてい」たので、「聴き耳」を「耳にあて」と、「人間はばかなものだ。あれだけ名前の知れたお医者が集まっていて、殿さまの一人娘の病気をなおすことが出来ないでいるよ。あれは薬では治らない。御殿の家の屋根を葺いたとき、まちがって茅のなかに蛇を葺きこんだからだ。それさえほどいて、蛇に食物をやって助けてやると、あのお嬢さんの病気はすぐになおるのだがね」と言っていた。

殿さまのところに行くと、「門の前に立札が立って」いた。「一人娘の病気をなおした者には、望みどおりの褒美をやる」とあった。男は、「殿さまの家に入り」、「わたしが、お嬢さまのご病気をなおしてあげます」と申し入れると、医者たちに笑われた。しかし、男はかまわず「これは、何か生き物が苦しんでいて、そのたたりで起こった病気だ」、「それは蛇だ」と言った。

「殿さまは、家来どもにいつけて、さっそく屋根をほどいて見」と、「蛇がもう死にそうになって苦しんでいたので、すぐ助けだして米粒を食べさせ」た。米粒をやるごとに蛇がよくなり、それに歩調をあわせて、娘の病気もよくなっていき、すっかりよくなった。

「男は、とうとうその婿になった。」

この『聴き耳』の男とお姫様の結婚は、『三人兄弟』の二郎治とお姫さまの結婚とまったく同じである。つまり、お礼結婚である。男は、鳥の鳴き声を聞き、「お嬢さんの病気」の治し方を知ると、「これはよいことを聞いたと思って、殿さまのうちの門まで行って見」た。「ところが、門の前に」「一人娘の病気をなおした者には、望みどおりの褒美をやる」という「立札が立っていました。」これでわかるように、この男も『三人兄弟』の二郎治と同じで、お姫様をお嫁さんにもらうことが目的で、殿さまのところへ行っただのではない。お姫さまの病気を治しに行ったのである。その結果として、立札が目にとまったまでのことである。違いは、「聴き耳」と「箆」の違いに過ぎない。それに「一人娘の病気をなおした者には、望みどおりの褒美をやる」という立札は、『尻なりべら』の「一人娘のふしぎな病気をなおした者には、何でも望みしだい」という高札とまったく同じで、娘をやることまでは意図していなかったかもしれない。また、この立札を見て、娘をもらえと思った人は非常に少ないであろう。この話の男もそのはずである。

この話には、感謝の言葉は一切出てきていないが、お殿さまは、周囲の嘲笑をよそに、あるいはそれに逆らって、「きたない男」に「大事な一人娘のことだ、誰でもかまわない、見てもらってくれ」と言って、男に見てもらい、娘の病気が治り、娘を嫁にやるまでになったのであるから、お殿さまに感謝の気持ちが十分にあったと推察することは出来る。

男のお姫さまに対する気持ちは一切語られていないので、まったくわからない。貧乏人に見えるこの男、動物（鯛）を助けてやるほど優しい心の持ち主で、お姫さまの病気を治してあげようと思いきすれ、お姫さまをもらうことなど考えていなかったと思う。しかしながら、結果としては、この昔ばなしは、心優しい男がお姫さまをもらって出世したという成功譚である。

この殿さまの態度には、語られているかぎり、家父長的なところはほとんど見当たらない。『三人兄弟』の長者もほとんど家父長的でなかったが、この殿さまは、その長者よりも家父長的でない。『三人兄弟』の場合は「(長者の家では)お姫さまの婿にしました」とあるが、

『聴き耳』では、単に「男は、とうとうその婿になった」とあるだけだからである。

お姫様については、全然とっていいほど語られていないし、『三人兄弟』の場合とまったく同じで、難病を治してもらったことへの喜びも感謝の言葉さえもないので、お姫様の人となりはよくわからない。この話は、動物報恩譚でもあり、鯛を助けた主人公が聴き耳をもらい、その威力で鳥の声を聴き、お姫様の難病を治して、そのお姫さまをお嫁さんにもらうという奇想天外な話の運びが主で、お姫様とその病気はその単なる一つの歯車に過ぎない。お姫様の人格すらないのは、『日本の昔ばなし』における女性の低い地位とともに、こういう話の運びにもよる。お姫様（をもらうこと）は、動物を助けた貧しいが心優しい男が出世する、その成功の最高・最大の象徴に過ぎないのである。

二人の結婚生活も幸福か不幸かまったく不明である。

お姫さまが美しい人かどうかについても、『三人兄弟』の場合とまったく同じで、一切語られていないので、わからない。『聴き耳』男の直接の目的が、『三人兄弟』の二郎治と同じで、お姫様をもらうことではなかったからであろう。これと対照的なのが『尻なりべら』である。この話では、ほら吹きは目的は、「かねて」「ほれていた」「美しい娘」をお嫁さんにすることであった。

『聴き耳』でも、その名のとおり「聴き耳」という異次元の世界からの贈物が難病を治療するにあたって、したがって、お殿さまのお姫さまをもらうにあたって、決定的な役割を演じている。

『聴き耳』も『魚女房』と同じで、動物（鯛）の報恩譚である。しかし、男とお姫さまの結婚は「報恩結婚」ではない。

第3番目は『夢見小僧』である。

「正月の二日に、師匠から、初夢を見たものは話をするようにとのお達しがあった。」ところが、一人の子供が「どがんことがあってもいわん」と言った。そこで「うちろし船（うつほ船）に乗せて流」された。

「正月の十六日には船は鬼が島についた。」「鬼ども」が「船をひっぱった」ら、「船が二つに割れて、なかから子供がでて来たので」、「大将」に話した。「すると大将は『^{まないた さかなざり}俎で肴切りにしてもって来い』といった。子供は『待ってくれ、斬られてこまめになってからはいかん。いまのうちに話したいことがある、大将にあわせてくれ』といた。」

「子供は大将のところに行くと、『わしとは三人で賭けをして、一人は竜宮に、一人は地獄極楽に、俺はここへ来て宝物を見て帰る約束をした。俺は死ぬ前に宝物を見て死にたい。見て死ねばあの世で話が出る』といた。すると大将は、棒を三本もって来て見せて、『一本は千里棒というもので、千里いば千里とぶ。一本は生き棒というもので、死んだ人間の体をなでれば生きかえるもの。一本は聴耳。これは鳥けだものということがわかるもの』と教えた。『手にどもさわらせてくれ、三人そろったときに、お前はにぎっても見なかったかといわれるから』『にぎってもよいが、ものいわじにぎれ。』子供はにぎるが早いのか、『千里、千里』というて、大阪の里までとんだ。」

「子供が大阪のある家の門先に来たところが、鴉が二羽とまっていた。聴耳棒を耳にあてて見ると、『西の長者の一人娘が死のうとしている、はよう急げいそげ』といている。」子供が「西の長者のところへ行」き、「俺は法者（占師）じゃが、死んだ娘を見たいもんだ」と言うと、「長者どんは喜んで、『さっそく娘を見てくれ』といた。」子供は「死んだ娘のまわりに屏風

を立てて、生き棒でなでたところが、おずみ（目をさます）だした。」「長者どんでは、『この人は命の主だから』というて、子供を娘の躰にし」た。

ところが、「東の長者の娘」が死に、西の長者の躰に「頼みに来た。」「西の長者」は「養子にとられる」ことを恐れ断った。「東の長者は決して躰にはのぞまんというたので、躰どんを助けにやった。」命を助けてもらった「東の長者」は、前言をひるがえし、躰を返さなかった。

西の長者が「殿さまにうったえ」と、「上十五日は東、下十五日は西の躰になれ」という裁きが下った。

「息子は二つの所帯をもらって、十五日目、十五日日には途中の橋で二人の女に送り迎えされて、（「二人の女に手をうちかけて橋を渡るといふ」）初夢のとおり二人の女の肩に手をかけることが出来たということである。」

この『夢見小僧』の結婚のいきさつも、東西の長者が、死んだ娘を生き返らせてもらったお礼に、いな、命の恩人への感謝の気持ちから、躰にしたもので、これもお礼結婚である。

夢見小僧も、死者を甦らせようとしたのであり、結婚を目論んでいたとも思えないし、東西の長者の娘に好意を抱いていたとも思えない。結果として、二つの所帯を持つという、男（夢見小僧）にとって夢のような話を実現したのであろう。

一旦死んだのに、生き返らせてもらい、夢見小僧と結婚することになった、東西の長者の一人娘が、人間としてどんな人物なのか、どんな感情や意思を持っていたのか、さっぱりわからない。この点は『三人兄弟』や『聴耳』と同じである。

二人の結婚生活が幸福か不幸かも不明である。ただ、男の方は、二人の女を女房にし、半月ごとに行き来する生活が、得意げではある。

『夢見小僧』という昔話も『三人兄弟』とまったく同じで、長者どん（もしくはその家）が、夢見小僧を「命の主」、命の恩人ということで「躰にし」ている。そこでは、お姫さまの意思も感情も人格もまったく無視されている。長者どんは家父長的であるが、それほど露骨ではない。

この『夢見小僧』では、異次元の世界からの贈物は「千里棒」、「生き棒」、「聴耳」と三つもある。夢見小僧が結婚するにあたって力を存分に発揮するのは「生き棒」である。「聴耳」は補助的な役割を演じているだけであり、「千里棒」は、この面では、まったく何の働きもしていない。

第4番目は『尻なりべら』である。

「あるところに大ほら吹きがあった。あまりほかばかりつき歩くものだから、世間では誰も相手にするものがなくなって、ひどく貧乏になった。」ほら吹きは「心を入れかえて村の観音堂へ行って、七日七夜のおこもりをして『どうぞ観音さまもうし、おらを世間なみのま人間にしてください』と、願をかけた。」「七日七夜の満願の朝になり、「お堂の前坂をおりてくると、鳥居の下に赤い小籠が一丁おちていた。」「『ぜえっ、こんな物か』と思ったけれども、「拾い上げ、ふところに入れてまたぶらぶらと広い野中を歩いていった。すると急に裏心がさして来たので、道ばたの藪かげに入った。そして用をすましてから、何かないかなあと思って腰のあたりをさぐると、さきの小籠が手にふれた。しかたがないのでそれで尻をふいた。すると…いきなり鳴りだした。」「ひどくたまげ」たが、今度は「朱塗り」の方でなく、「裏の黒い方」でたりとなでて見ると、「音がびったりとまってしまった。ふふんこれは面白いものだと思った。」

「町はずれ」で「小便をしていた」「じょやく（めす）馬」の尻でためすと、「馬の尻」が「どえらい音を出してなりわたった。」「馬子は、とび上がってたまげ」た。ほら吹きが「小籠の裏の方でてらりとなでると、ぴたっと大きな鳴り音が止まった。馬子はひどく喜んで、ほら吹きに酒を買ってお礼をした。ほら吹きはこれはいいものが手に入ったと喜んで家に帰った。」

「ほら吹きと同じ村の長者どんに美しい娘があった。ほら吹きはかねてその娘にほれていたが、いいよるときがなくてうれえていた。ときがあったら何とかして、娘の聲どものになりたいものだいつも考えていた。そこである夜、長者どんの雪隠にし**のびこ**」み、「小走りに入って来た」「娘の白い尻を小籠でてらりとなでた。するといきなり」尻が鳴りだした。「娘はひどくたまげて、おいおいと泣いて奥の座敷にかけこんだ。」「娘の尻鳴りは」「**昼夜鳴りつづけ**」た。「長者どんの家では大さわぎにな」り、「**医者や法者をよん**」だが、無駄で、とうとう「門前に『一人娘のふしぎな病気をなおした者には、何でも望みしだい』という文句を書きつけた高札をたてた。」

ほら吹きが長者どんの家に行き、「俺は表の高札の文句を見て来たものでござるが、娘さまの病気をなおして見せる」と言い、いぶかる者どもを前に、娘の「周囲にさりと屏風を立てまわさせて」、「娘の小さい尻を小籠でてらりとなで」と、「大鳴り」が「蓋をしたようにぱたっと止ま」った。「娘は『あれやっ、おらなおった』といって、踊りをおどって奥座敷からかけ出した。長者どん夫婦も『おかげさまだ、おかげさまだ』といてたいそう喜んだ」

「ほら吹きはとうとう長者どんの聲どものになってえらく出世した。小籠は「**神さまにまつって御籠おへら大明神様と申し上げた**」。

ほら吹きと長者どんの娘の結婚は、ほら吹きが長者どんの娘の尻鳴りを治したお礼に娘をもらったのであるから、お礼結婚である。しかしながら、『一人娘のふしぎな病気をなおした者には、何でも望みしだい』という高札は、尻鳴りを治したならば、娘でさえも嫁にやるという条件ともとれる。つまり、二人の結婚は条件結婚とも解釈できる。しかし、「ほら吹き」が結婚をねらっていたのは明らかであるが、長者どんがそこまで意図して高札を出したかどうかは定かでない。つまり、長者どんは、病気治療のお礼に、「何でも望みしだい」と言っているだけで、娘をやるということは長者どんの「望み」のなかには入っていなかったかもしれない。単にお金や宝物をやることで済むと考えていたかもしれない。しかも、病気を治してもらった人が、嫁に行くことになった当の娘で、娘の両親も「おかげさまだ、おかげさまだ」と、大喜びし、ほら吹きに非常に感謝している。お礼結婚のお礼たるゆえんである。だから条件結婚とは言えない。また、尻鳴りは、人間にとってどうすることもできない病気で、それを治すことは難問でもあり、難題解決結婚とも解釈できる。しかし、尻鳴りは、ほら吹き自身が作り出したものであり、その治し方もほら吹きは知っている。このあたりが難題解決結婚の難題とは違うところである。それゆえ、時に命がけの、シリアスになりがちな難題への挑戦とは違い、長者どんの娘の「ふしぎな病気」を治すという課題へのほら吹きの挑戦は、コミカルな筋の展開を示す。このこととも関係することであるが、難題解決結婚の場合は、娘（お姫さま）をやるということは、この世の人間にとっては解決不可能な、非常に困難な、時に命がけの難題を解決したことへの褒美であるが、お礼結婚の場合は、あくまで治療や救助へのお礼である。つまり、娘（お姫さま）は、前者の場合、最高の褒美の象徴であり、後者の場合、最高のお礼の象徴なのである。

この話でも、長者どんの態度に、家父長的な傾向はほとんど見られない。「何でも望みしだい

い」というのと「娘をやる」というのでは大きな違いがある。娘の病気が治ったことに喜んだのも、長者どん夫婦であり、旦那のみではない。

娘の方も踊りを踊って喜んでいる。結婚に対する娘の意志や感情も親に対する態度も、明らかでないが、病気に対する悲しみと喜びは十二分に表現されており、人格がないということはない。しかし、結婚となると、娘の意思や感情や気持ちはまったく後景に退く。それらは完全に無視される。結婚後の娘の様子もまったく語られていない。要するに、娘は、ほら吹きの治療への、お礼の品物に過ぎない。

ほら吹きは、語られているとおりで、長者どんの「美しい娘」に「ほれていた」し、「何とかして、娘の聲どどになりたいものだといつも考えていた。」つまり、ほら吹きは最初から長者どんの娘さんと結婚したかったのである。

また、この話でも、異次元の世界からの贈物の「小篋」が登場し、ほら吹きを抑えて主役を演じていると言ってもいいくらいに大活躍をする。

第5番目は『鼻のび糸巻』である。

ある長者の夫婦に「子供が一人おらいた。」「^{ふたおや}二親が死」んだうえ、博打好きなので、息子は一文無しになった。

乞食をして「国々をあるいて」いたが、「ある日、あるお堂のところで日がくれた。」「お像の前に金が小積んであった」ので、神様と博打をした。勝って「お堂を出て行こうとしたところ」「おい、おい」という声がし、博打で「やっと勝った金を、お前にとられてはかなわん。ついてはこの糸巻をくれるから、金は返してくれ」と言った。糸巻は、「金持の鼻を『はなで一、はなで一』というて、ふとこで糸を十尋はなせば、十尋高こうなる。二十尋はなせば、二十尋高こうなる。また『はなひっこめ一、はなひっこめ一』ちゅうて糸をまけば、もとのように鼻が短くなる」ということだった。

男が糸巻を持って「向こうへ行きおらったところ」、「立派な、東西に蔵を建てた家」の「三階の窓から、うつくしい娘の子が世間をながめていた。」「はなで一、はなで一」と言って、「ふとこで糸をはな」すと、「娘の子の鼻が四五間のび」、「びっくりして内へ倒れた。」

「その晩、息子は長者どんの近所の、爺さんと婆さんと二人いる家へ行き、「泊めてもらう」た。「長者どんの家の前がさわがしい」ので、聞くと、「今朝、一人娘の鼻が四五間ものびて、どんな医者に見てもろうても、どんな占に見てもろうてもなおす人がおらじ、騒動しておる」と言うので、「わしも長い鼻をちょっと引っこましたことがあるが、さあ、四五間もある鼻ならばどうか」と答えた。「婆さんが長者どんへとんで行」くと、長者どんは「早うつれて来てくれ」と言った。

息子は「六枚屏風を立てまわして、『のむ、のむ、のむ』と祈祷をするまねをして、『はなひっこめ、はなひっこめ』というて、糸をまいた。」鼻はちちんで、もとのようになった。「長者どんでは大へんな喜びかただ。『この病気はまた出るかもしれんが、用心しやれ。わしは帰ります。』」と言うと、「『いいや、ここにいてくれ、せひここの跡取りになってくれ』というので、そこの聲になった。」

後になって、みんなにせがまれ、男が鼻を伸ばすと、「天竺まで伸びた。」ちょうど天竺が火事で、鼻をちぢめると、「男ははななしになった」。

この『鼻のび糸巻』の男の下心は、『尻なりべら』の「ほら吹き」とまったく同じである。若干の違いは、こちらの男の振る舞いの方がより巧妙で、したたかだということである。男は、

わしが娘の（伸びた鼻の）病気を治してやるとは言わない、その娘の近所に泊まり、婆さんにそれとなく「わしも長い鼻をちょっと引っこましたことがあるが、さあ、四五間もある鼻ならばどうか。」と言う。つまり、控えめに言ったうえに、直接自分が行かず、婆さんを長者どんの家にとんで行かせ、長者どんの方から、来てくれと言わせる。それから、男は長者の娘の病をなおして、大変喜ばれた時、すかさず一芝居打つ。「この病気はまた出るかもしれんが、用心しやれ。わしは帰ります。」と、相手を誘導するせりふをはく。純粋な意味でお礼とは言えないかもしれない。相手に婿になってくれといわせる、滑稽味あるお礼の強制である。ではあるが、これも一種のお礼結婚である。

長者の一人息子だったが、博打で一文無しになったこの男、最初から長者の娘を獲得するのが目的であった。しかしこのことは、男が「うつくしい娘」を純粹に妻として欲しいと思ったということ必ずしも意味しない。この男の場合には、「うつくしい娘の子」が「蔵を建てた」「長者どん」の娘なので、娘を獲得できたうえに、なおかつ金持ちになれるという意図が、否むしろ後者の金目当ての結婚という意図が透けて見える。このことは「なんとかしてこの家の贅になりたいと思って」という語りがそのことを如実に示している。これは、長者どんの「美しい娘」に「ほれていた」『尻なりべら』の「ほら吹き」が「娘の贅どのになりたいものだ」といつも考えていた」というのとは大いに違う。

『鼻のび糸巻』でも、娘のことはまったく語られない。したがって、娘がどんな人物なのか、何を考えていたのか、どんな感情を持っていたのか、まったくわからない。

『鼻のび糸巻』の長者には、「跡取りになってくれ」という語りに見られる分、家父長的である。これに対し、娘の意志や感情はまったくうかがえない。ここでも娘はお礼の品物である。

この昔話に出てくる「鼻のび糸巻」は、神様が下さったものであり、まさに異次元の世界からの贈物である。ただし、この神様、博打好きで、どこか人間味、滑稽味がある。この話は、結末が象徴的であるが、全体としても、笑話である。

第2節 類型7のお礼結婚

これは『魚女房』しかない。

「昔貧乏な男が浜に」「行くと、「亀が卵をたくさんかえして」いた。「親亀は浜まで迎えに来たが、子供たちのところに人間がいるので、水の上に首だけ出してながめてい」た。「男はかわいそうに思って、亀の子を砂のなかから掘り出して、『さあ、みんなつぎつぎに泳いで行けよ』と行って、親亀にわたしてや」った。

「男は焚物をひろって家へ帰ろうとしていると、さっきの親亀がやって来て『さきほどはありがたいことでした。ぜひお礼をしたいと思いますから、どうかわたしの背中にのってねいんや（海底の浄土）まで来てください』といった」。

男が「亀の背中に乗り」、「亀が翼を一はねしたら、ねいんやにつ」いた。「亀は、途中で男に、ねいんやの神さまが、あなたに、『何や欲さる』ときかかれたら、『あなたの一人娘こそ欲さる』と答えなさいと教え」た。

「男は、神さまの前につれて行かれ、いっぱいご馳走にな」った。「そうして神さまが、『お前は何かほしいか』ときかかれたので、『わたしはあなたの一人娘がほしい』というと、神さまは一人娘をくださ」った。そして神さまは「娘に『ちーちー小函』を与えた。

「男は妻をつれて島へ帰って来」た。「帰ると、食物のことはなにも心配なく、何でも妻が

ととのえてくれ」、「いっときの間に金持にな」った。「そのうち、子供が三人でき」た。

「妻はまい日、表座敷のまんなかで、障子を立てきて、水を浴び」たが、「かねて夫に、自分が水を浴びるところは、決して見てはならないと約束してあ」った。「ところがある日」
「そっと覗いて見」ると、「魚の姿になって」「はたはたと水を浴びて」いた。

着物を着て、妻は急にご馳走をつくりはじめ、「あなたは見てはならないと、あれほどいっ
ておるのに見てしまったから、もう二人は一代のくらしはできません。下の子供はわたしがつ
れて行きますから、上の子二人はあなたが育てて下さい。子供を育てるだけのことは、わたし
がしてあげます」といい、「ちーちー小函」を夫に与えた。そして「この小函は決してあけて
はなりません。もしあける時は、海ばたで二つの足を水の中に入れてから、あけなければなり
ません」と言ってから、「末の子をつれて出て行」った。

「この妻はたいそう美しい女だったそうで、女が家を出てしまうともう夫は淋しくてたまら
ずに」、「ちーちー小函」を開けた。「ところが、小函のなかから白い煙がぼーと出て、家はた
ちまち昔の貧しかったころのままに変」わった。

「後に、男は後妻をもらったので、二人の子供は生きうせにうせてみえなくなったというこ
と」だ。

この話の結婚は、亀の子を助けてくれた男に、親亀が「ぜひお礼をしたい」と言って、「ね
いんや」へ男を連れていき、そのお礼として、ねいんやの神様の一人娘をあげた — 正確には、
男が娘をもらえるように入れ知恵した — のであるから、お礼結婚である。

妻の父親は、魚であり、神様である。したがって、この結婚は、人間と神様の結婚である。
神様と結婚するような話は、グリム童話にはまったく見られない。また、妻も魚であるから、
この話は、動物の報恩譚でもある。しかし報恩結婚ではない。

神様の父親の振舞いは、「欲しい」と言われたものを無条件でやっているという意味で、父
権的である。娘は、結婚するまではお礼の品と同じで、娘の意志や人格はまったくない。しか
し、それは結婚前までであり、結婚後は一変する。結婚後は、妻の意志や決意は断固としたも
のとなる。約束を破った、あるいは禁を犯した夫に対し、「もう二人は一代のくらしはできま
せん」と決然と離縁を言い渡し、家を出て行く。この永遠の別れ、永遠の別離はグリム童話に
はない。

貧乏男の方は、亀の子は助けたが、まさか「ねいんや」の神様の娘をお嫁さんにもらうこと
など夢にも思わなかったであろう。また、亀に「あなたの一人娘こそ欲さる」と答えなさい、
と言われて、そう言ったときも、また娘をもらったときも、男は何の感情も表さない。「たい
そう美しい女だった」とはいえ、男が娘に好意を抱いていたとも思えない。

結婚生活は、離婚したうえに、2人の子供とも別れてしまったのだから、不幸である。

男が結婚するまでの過程を見ると、男は亀の子を助けただけで、後は異次元の世界の「親亀」
が背中に乗せて、異次元の世界そのものの「ねいんや」へ連れて行ってくれ、「一人娘が欲し
い」と答えなさいと言われて、答えたままである。男は結婚に辿り着くうえで、殆ど何の役割
も演じていない。これは、この話が報恩結婚の要素も含んでいるからであろう。また、男の結
婚までの過程で、異次元の世界のものや贈物（ちーちー小函）が登場し、その中には、男と
「ねいんや」の娘との結婚が実現する上で大きな役割を演ずるものもあるが、この男の結婚の
場合、結婚相手そのものが異次元の世界の娘である点が非常に特異である。

第2章 グリム童話のお礼結婚

グリム童話には、お礼結婚は『熊皮男（Der Bärenhäuter）』（KHM101）しかない。

兄さんたち二人に「お前など必要ない」と言われて、見放された弟（兵隊）が仕方なくやってきたところが荒野であった。そして「円形状に並んだ木」の下に座り、嘆いていた。すると、突然ごうごうという音が聞こえた。見まわすと、緑色の上着を着、馬の足をした見知らぬ男（悪魔）がいた。悪魔は兵隊の窮状を知っており、緑色の上着を脱いで兵隊さんに与えた。そのポケットにはいつも金がいっぱい入っていた。しかし、その代わり、7年の間体を洗うこと、髭と髪をとくこと、爪を切ること、主の祈りを唱えることは、してはならないということであった。そしてその7年間に兵隊が死ねば、悪魔のものになり、生きながらえれば、自由の身になり、一生お金持ちでいられるという。

2年も経つと、兵隊は、髪の毛は顔中を覆い、髭は伸び放題、爪は鉤爪（Krallen）となり、顔は垢などの汚物（Schmutz）で覆われ、お化け（ein Ungeheuer）のようになった。

4年経った時、緑色の上着を着た怪物の兵隊は、汚らしい兵隊が泊まることを嫌がる宿屋の主人に金貨をつかませて、やっとその宿屋に泊めさせてもらった。夕方、隣の部屋で嘆き悲しむ声が聞こえたので行ってみると、老人が座って泣いていた。兵隊は老人から事情を聞き、宿屋に老人の借金の支払いをすませたうえに、老人にお金を持たせてやった。老人は感謝し、3人の「私の娘たちは驚くほど美しい。そのうちの一人をあなたのお嫁さんを選んで下さい。meine Töchter sind Wunder von Schönheit, wähle dir eine davon zur Frau.」と言った。長女は化け物の熊皮男を見て逃げ出した。次女も熊皮男よりは本物の熊の方がましだと言って、熊皮男との結婚を拒否した。しかし、末の娘は「愛するお父さん、この方はいい人に違いないわ。だって、困っているお父さんを救って下さったのですもの。そのお礼に、お父さんがこの方に嫁にやると約束なさったのであれば、約束は守らなければなりませんわ。lieber Vater, das muß ein guter Mann sein, der Euch aus der Not geholfen hat, habt Ihr ihm dafür eine Braut versprochen, so muß Euer Wort gehalten werden.」と言った。

熊皮男は、指から指輪を外し、それを二つに折り、自分の名前を書いた半分を娘に渡し、残りの半分を自分のものとしてとっておいた。そして「私はもう3年間歩き回らなければなりません。しかし、私が戻ってこなければあなたは自由です。私は死んでいるのですから。しかし、神様が私にずっと命を授けて下さるように神様にお祈りして下さい。ich muß noch drei Jahre wandern: komm ich aber nicht wieder, so bist du frei, weil ich dann tot bin. Bitte aber Gott, daß er mir das Leben erhält.）」と言って、別かれた。

7年が無事過ぎて、彼は以前の円形状に並んだ木の所へ行った。すると、ヒューヒューという音を立てて、悪魔がやって来た。悪魔は不愉快な顔をして彼を睨み、古い上着を彼の方に投げ、悪魔の緑色の上着を返せと言った。熊皮男が元のきれいな体に戻せと要求すると、悪魔は水を持ってきて熊皮男の体を洗い、髪を梳き、爪を切ってくれた。

そして白馬四頭立ての馬車に乗って、花嫁のところへ行った。しかし、誰も彼が熊皮男であることに気がつかなかった。花嫁さんは喪服を着、目をあげず、一言もしゃべらなかつた。「見知らぬ男は、花嫁と二人だけになるや否や、半分の指輪を取り出し、それをぶどう酒の入ったコップの中に入れ、テーブル越しに花嫁に渡した。花嫁がそれを受け取り、ぶどう酒を飲み干すと、底に半分の指輪があった。それを見て、花嫁の心は高鳴った。花嫁はネックレスにつ

けていたもう一つの指輪の半分を取り出して、合わせて見ると、二つはぴったりと合った。そこで彼は『私が約束をしたお前の花婿だよ。以前は熊皮男であったが、神様の御慈悲でまた人間の姿を取り戻し、また清らかな身になったのです。』と言って、花嫁の方へ行き、花嫁を抱きしめて口づけをした。Der Fremde, sobald er mit seiner Braut allein war, holte den halben Ring hervor und warf ihn in einen Becher mit Wein, den er ihr über den Tisch reichte. Sie nahm ihn an, aber als sie getrunken hatte und den halben Ring auf dem Grund liegen fand, so schlug ihr das Herz. Sie holte die andere Hälfte, die sie an einem Band um den Hals trug, hielt sie daran, und es zeigte sich, daß beide Teile vollkommen zueinander paßten. Da sprach er 'ich bin dein verlobter Bräutigam, den du als Bärenhäuter gesehen hast, aber durch Gottes Gnade habe ich meine menschliche Gestalt wieder erhalten, und bin wieder rein geworden.' Er ging auf sie zu, umarmte sie und gab ihr einen Kuß.」

姉二人は、立派な男性が以前の熊皮男で、妹と結婚することを知り、腹を立て、一人は井戸に身を投げ、もう一人は木に首をくくって死んだ。夕方、緑色の上着を着た悪魔がやって来て「おまえの魂一つの代わりに、わしは今や二つ魂を手に入れたぞ。nun habe ich zwei Seelen für deine eine.」と言った。

熊皮男と末の娘の結婚にいたる過程を見ると、お金の窮した老人が宿屋の借金を払うことが出来ず、牢屋にぶち込まれる運命だったところを、熊皮男が借金を肩代わりしてやり、老人を助けてやった、そしてそのお礼として、老人が3人の娘たちのうちの一人をお嫁さんにあげるという約束をし、実際そうだったのであるから、これはお礼結婚である。

助けてもらった父親は「私の娘たちは驚くほど美しい。そのうちの一人をあなたのお嫁さんを選んで下さい。」と言う。このように、父親は、窮地を救ってくれた恩人に、お礼として、娘を、それも娘の気持ちや意志をまったく確かめず、勝手にやると約束している。しかも、「娘たちのうちの一人を」と、娘たち一人一人がまるで意志も感情もない、単なる品物であるかのように娘たちを扱っている。この父親の態度は家父長的な言動の最たるものである。娘の意向をまったく確かめもせず、約束したものだから、案の定、上の娘二人は、熊皮男を外見から判断して、男との結婚を強く拒否する。ここに、単なるモノ扱いされているにもかかわらず、父親の意向に逆らう、娘たちの強烈な意志がはっきりと表れている。他方、非常に家父長的に振舞った父親ではあるが、娘たちに反対されても、黙ったままであり、娘たちの失礼な言動をたしなめることもしない。ましてや、居丈高に娘たちに命令したり、自分の意見を通そうとしたりすることはない。この面では、父親に家父長的で、強権的なイメージはない。

では、熊皮男と結婚した末の娘はどうであろうか。「愛するお父さん、この方はいい人に違いないわ。だって、困っているお父さんを救って下さったのですもの。そのお礼に、お父さんがこの方に嫁にやると約束なさったのであれば、約束は守らなければなりませんわ。」と言う。このように、末の娘は父親に対して非常に従順である。末娘が父権を別の側面から支えているとも言える。しかし、それは末の娘自身の考えでもある。つまり、末娘は、たとえ相手が人間の姿をしておらず、熊皮男であろうとも、約束は守らなければならない、助けてもらった恩義には報いなければならない、と考えているのである。したがって、熊皮男との結婚の約束の際には、末娘は義理人情と父への忠誠以外に何も考えていない。そういう状態で、結婚を受諾しているに過ぎない。もっとも、実際に結婚をすることになる直前、末娘は熊皮男の本当の立派な姿を見て、心がときめく。

末娘と結婚した熊皮男も、末娘に愛情を抱いていたわけではない。3人娘の内、上の二人に逃げられたため、末娘をもらうことになったからである。つまり、結婚できさえすれば、老人の3人の娘の内、誰でもよかったのである。不思議なことであるが、青年も末娘も、相手が好きでもないのに、結婚相手に対して非常に忠実である。

二人の結婚生活は、幸福か不幸か不明である。

二人が結婚にいたる過程において、特に結婚へと結びつく青年の行為において、異次元の世界からの登場人物とか贈物が直接重要な役割を果たすことはない。しかし、異界の悪魔（der Teufel）が登場してきて、お金の一杯詰まった「緑色の上着」を青年に与え、青年を助けた。青年は、結婚のことはまったく予期していなかったが、そのお金で老人を救い、その結果としてお礼に娘をもらった。つまり、飢えていた兵隊が金持ちになり、美しい娘さんと結婚できたのは、ポケットにいつでもお金が一杯詰まっている緑色の上着という悪魔からの贈物があったからである。だから、異次元の世界の人物と贈物が何の役割も果たしていないとは言えない。むしろ、結果論としては、それらが決定的な役割を果たしたと言えよう。

さて、これで、『日本の昔ばなし』とグリム童話のすべてのお礼結婚を見てきた。以上考察してきたことを表にしてみると、次のようになる。

お礼結婚

『日本の昔ばなし』											
類型	昔話	助ける主人公	助ける動機・結婚への意志と感情	助けられる人	その状況	お礼をする人	お礼として与えられる人		父の態度	結婚生活	助ける際の異界の存在や贈り物
							その人の結婚への意志と感情	その人の容姿			
3	三人の兄弟 I 105	二郎治庶民	病気治療：結婚する気持なし	長者のお姫さま	瀕死の大病	長者の家	長者のお姫さま：不明	不明	家の支配はあるが父も母も登場せず	不明	篋
	聴き耳 I 115	男	病気治療：結婚する気持なし	殿さまのお姫さま	不治の病	お殿さま(父)?	殿さまのお姫さま：不明	不明	影が薄い	不明	聴き耳
	夢見小僧 II 87	小僧	死者を蘇らせる：好意はない	西と東の長者の娘	死者	東西の長者(父)	東西の長者の娘：不明	不明	家父長的だが、露骨でない	不明	生き棒
	尻なりべら II 96	貧乏なほら吹き	娘をもらう	長者の娘	尻なり	長者(父)?	長者の娘：不明	美しい	家父長的でない	不明	篋
	鼻のび糸巻き II 193	貧乏男(長者の息子)	長者の婿になる(金目当て)	長者の娘	長い鼻	長者(父)	長者の娘：不明	美しい	家父長的だが、子供思い	不明	鼻のび糸巻
7	魚女房 I 32	貧乏男	憐れみの心：結婚意図なし	亀の子	海へ帰れない	ねいんやの神様	神様の娘：不明	美しい	家父長的	不幸	無し
グリム童話											
4	熊皮男 101	除隊の兵隊 貧乏	憐れみの心：結婚の意図なし	無一文の老人	借金苦	老人(父)	末の娘：覚悟はあるが、好意は無い	美しい	それほど家父長的ではない	不明	緑色の上着

第3章 お礼結婚の特徴

この表を見ると、お礼結婚の以下のような特徴が浮かび上がってくる。

お礼結婚の第1番目の特徴は、誰かの窮状、奇病を救うのは、すべて男性であるということである。女性は一人もいない。ただし、逆は真ならずである。つまり、救われるのは女性であり、男性ではない、とは言えない。例えば、『熊皮男』で救われるのは老人（男）であり、『魚女房』では救われるのは人ですらない。亀である。しかも、亀の子というだけで、雄か雌かわからない。

第2番目の特徴は、助けられる人（7話中5話が娘で女性）が大事な家族の一員であるということである。例外は『魚女房』だけである。しかし、亀の子も、ねいんやの神様からすれば、同族であり、家族の一員ともみなすことができ、例外とする必要はない。

第3番目の特徴は、難病や貧困など、何らかの非常に困った状態を助けてもらったので、当然のことながら、助けてくれた主人公に対する感謝の気持ち、お礼をしたい気持ちがあるということである。しかも上で考察したように、お礼結婚では、家族の一員のような、血のつながった非常に大切な人が救われるので、お礼、感謝の気持ちが非常に強い。これはグリム童話のお礼結婚1篇と『日本の昔ばなし』のお礼結婚7話すべてに共通する。感謝やお礼の気持ちを表す表現が一切なかったのは、『聴き耳』だけである。しかし、この場合も、感謝の言葉こそないものの、状況から殿様が感謝していることはよくわかる。

第4番目の特徴は、助けてもらったことに感謝し、実際にお礼をするのは、父親であるということである。例外は『三人の兄弟』と『魚女房』だけである。前者では父親も母親も登場しない。長者のお姫様（娘）の難病を治してくれた二郎治に感謝し、二郎治を娘婿にしたのは家である。しかし、それを決めたのは恐らく家父の長者どのその人であろう。それゆえ、『三人の兄弟』は例外とはみなし難い。後者では、亀の子を助けてもらったことに対し、親亀も感謝し、お礼を言うが、実際にお礼をするのは「ねいんや」の神さまである。しかし、お礼の中身を決めたのは親亀である。つまり、親亀が実質的にお礼とお礼の中身を仕切っているのである。

第5番目の特徴は、その感謝の印であるお礼の品物がすべて女性であるということである。つまり、お礼は、父親（あるいは神様）が助けてくれた人に娘を嫁にやるということなのである。例外はない。

第6番目の特徴は、『日本の昔ばなし』に関してであるが、お礼結婚では、女性（娘）に感情や意志や人格がまったくない、つまり人間らしさがまったくないということである。とりわけ結婚に関して、それが顕著である。結婚という、昔の女性にとって、人生で最も重要な出来事を迎えるにもかかわらず、結婚に対する気持ち、考え、反応がまったくない（語られない）。例外とも言えないが、そのことから少し外れているように思われるのは、『尻なりべら』である。この話では、長者の娘は尻なり（という奇病）を治してもらうと、「あれやっ、おらなあった」と言って、喜びのあまり踊を踊りながら走る。ここに昔話としては珍しく豊かな感情があらわれている。しかし、こと結婚に対しては何の反応も示さない。もう一つは『魚女房』で、魚女房は自分の正体を見られると、「もう二人は一代のくらしはできません」と決然と別れを告げる。ここに女性の強烈な意志が見える。しかし、それは結婚後の話であり、結婚前は、その強い女性も単なるお礼の品物でしかなく、人格はない。

これと対照的なのが、グリム童話の『熊皮男』の女性（娘）たちである。このメルヘンでは、

娘たちがどういう考えを抱いているのかということがよくわかる。上の二人の娘は逃げ出したり、侮蔑したりして、父親の薦める熊皮男との結婚を断固拒否する。ところが、末の娘は結婚を受け入れる。その理由は、熊皮男が困っている父親を救ってくれたこと、それゆえお礼をしなければならないこと、またそういう人は善人であること、取り決めた約束は守らなければならないことである。しかも、結婚の直前になって、末の娘は、結婚を約束した熊皮男の本当の姿を見て、心をときめかす。しかし、熊皮男との結婚を決意した時は、彼女にとって最も重要だったことは、約束したことは守らなければならないということであり、彼女に熊皮男が善人であるとの認識はあるものの、恋愛感情などはまったくなかった。このように、グリム童話では、女性にメルヘンとしては異例なほど豊かな感情としっかりとした自分の考えがある。一言で言って、はっきりとした女性の自我の覚醒が見られる。

しかし『日本の昔ばなし』のお礼結婚では、女性に感情や意思がまったくない。人格すらない。自我の目覚めの兆しは皆無である。これは、女性（娘）がお礼の品物として恩人に与えられる話の筋と関係しているし、またマックス・リュートィの言うメルヘンの本質（Max Lüthi: *Das europäische Volksmärchen*）からして当然といえば当然なのであるが、『日本の昔ばなし』の他の種類の結婚でも、こと結婚に関しては、女性の感情、意思、人格がほとんどないか、全然ないという事実、それと対照的に、グリム童話には女性に豊かな感情と確固たる意志、考えがある場合がいくつもあるという事実をあわせて考えると、戦前の日本の家父長制のもとでの女性の弱い立場、位置、地位をある程度反映した結果なのかも知れない。グリム童話は、初版では、末の娘は「愛するお父さん、お父さんが約束し、また困ったときにこの方に助けていただいたのだから、私はお父さんに従いますわ。lieber Vater, weil ihr es versprochen hast und er euch auch in der Noth geholfen, so will ich euch gehorsam seyn.」と言い、熊皮男との結婚を受け入れている。しかし、第7版では、末娘が結婚を受諾したその箇所は「lieber Vater, das muß ein guter Mann sein, der Euch aus der Not geholfen hat, habt Ihr ihm dafür eine Braut versprochen, so muß Euer Wort gehalten werden.」と書き換えられている。双方の台詞において、娘の気持ち、考えがはっきりしていることに変わりはないが、そこには大きな相違がある。初版では、お父さんがした約束だから従うこと、助けてもらった人に恩があること、という結婚受諾の理由を挙げているが、娘の台詞で最も重要な点は、要するに父親に従う（gehorsam）ということである。しかし、第7版では、「この方はいい人に違いないわ。だって、困っているお父さんを救って下さったのですもの。」と、相手に対し、娘が自ら（価値）判断を下している。そして初版の「お父さんが約束したのだから、私はお父さんに従いますわ。」という、ある意味で父親に従順な表現は、「(自分がした) 約束は守らなければなりませんわ。」と、より客観的に道徳観を述べる表現に変わっている。それは、自分が熊皮男のお嫁さんになることの承諾の台詞でもあるが、父親に自らの道徳観（約束は遵守すべし）を説いて聞かせるようにも取れる。単にgehorsamという言葉がなくなっただけにとどまらない。第7版では、娘の主体性、自立性が断然明確になったと言える。ここに、女、子供は従順であれ、困っている人は助けるべし、約束は守るべし、というグリム兄弟の道徳観を見て取ることができるように、それとはまた別の彼らの市民的価値観の一面を見て取れることもできよう。

第7番目の特徴は、主人公（男性）が助ける相手が主人公の結婚相手にもなっているということである。つまり、お礼結婚では、難病や奇病、死から助けてもらった娘がお礼の品物として、父親から助けてくれた男に嫁として与えられるという構造になっている。例外は『魚女房』

と『熊皮男』である。前者では、主人公が助けてやったのは、ねいんやの亀の子であり、後者では、娘の父親である。

第8番目の特徴は、報恩結婚と区別されるところであるが、助けてもらった人（7話中5話が娘）自身が、あるいはその人自身の意向で、お礼をするのではないということである。これも若干不明な話もあるが、ほぼ7話すべてに共通することである。『魚女房』でも、助けられたのは亀の子であるが、その子亀がお礼をするのではなく、親亀、神様がお礼をする。唯一例外と言えるのは『熊皮男』である。ここでは、助けてもらった父親が三人娘の「うちの一人をあなたのお嫁さんを選んで下さい」と言って、お礼しようとする。それでも、お礼をしようとする父の意向は、上二人の娘には完全に断られ、実現しない。末の娘からやっと同意を得ることができた。つまり、このメルヘンでも、父の意向が無条件では実現していないのである。助けてもらった父親が、何の障害もなく、自由にお礼できている訳ではない。その証拠に、父親が言ったように、熊皮男が三人娘のうちの一人を自由に「選ぶ」ことはできていない。娘の同意を得て初めて、お礼をすることができるのである。末の娘の意志で、父親のお礼が実現することになるので、少々強引ではあるが、『熊皮男』も事実上は娘がお礼すると言えないこともない。

第9番目の特徴は、少し奇妙ことであるが、娘をお礼の品物のように扱う当事者の父親の態度があまり家父長的でないように見えるということである。父親が明らかに家父長的な態度を取るのには、『鼻のび糸巻き』の長者どんと『魚女房』のねいんやの神様だけである。しかし、この二人の振舞いもそれほど強権的で露骨な印象を与えない。これは、救ってもらったことに、父親はもちろんのこと、本人も含めて、家族あるいは一族全員が感謝しているような話の筋と大に関わり合いがありそうである。しかし『日本の昔ばなし』とグリム童話を比較すると、明らかに大きな違いがある。グリム童話の『熊皮男』では、父親は娘たちに事情を話し、熊皮男との結婚を承諾するかどうか、娘たち全員の考えを聞き、娘たちの意向、意志を確かめている。『日本の昔ばなし』では、父親はそんなことはしない。しかも、グリム童話では、上の娘二人には、持ち出した結婚話は、逃げられたり、馬鹿にされたりして、けんもほろろに断られる。家父としての父親の権威、面子などあったものではない。これは、お礼結婚の話が家父長的な印象をそれほど強く与えないといっても、『日本の昔ばなし』のお礼結婚における、父親、あるいは家には決して見られない。だからといって、それが日本の昔話の特徴であると一般化することはできない。というのも、日本の昔話の中には、お礼結婚以外では、グリム童話の『熊皮男』の結婚話と同じような筋の展開があり、家父としての権威を娘たちによって傷つけられる父親が登場する話もあるからである。

第10番目の特徴として、お礼結婚では、結婚生活がはっきりと幸福だということがわかる話の一つもない。『魚女房』の男と魚女房の結婚生活は、永遠の別れを迎えたうえに、二人の子供と別れるので、明らかに不幸である。他はすべて幸福か不幸か、不明である。父や家が、娘を助けてもらい、そのお礼に娘を嫁にやる、ということで話が終わっているからであろう。しかも、その娘はお礼の品物に過ぎず、意思も感情も人格も、ほとんどの場合ないに等しい。だから、娘が結婚後どうなったか、結婚生活をどう送っているかという叙述がないのも当然と言えば当然である。話の中身、話のおもしろさの中心は、何といても、奇病、難病、死者を、異次元の世界からの贈物で、想像もつかないような方法で、あっという間に治すところにあり、男女の結婚とその後、話の重点はないからである。

第11番目の特徴は、上述したように、主人公が人や動物を助ける場合、お礼結婚では、必ず異次元の世界からの贈物を使う。否、それが決定的な役割を演ずる。例外は『魚女房』ただ一つである。これは動物報恩譚の側面を持つからである。

最後に、お礼結婚の類型である。グリム童話には、お礼結婚は『熊皮男』一つしかない。これは庶民の男性と庶民の女性の結婚の類型4である。『日本の昔ばなし』では、人間の男性と神様の女性が結婚する類型7の『魚女房』を除いて、あとはすべて類型3（庶民の男性と長者か殿様の娘の結婚）である。

異次元の世界からの贈物で、娘の奇病、不治の病を、あっと驚くような方法で、いとも簡単に治すのであるから、そのお礼には相当なものが必要であろう。それで、お礼に娘をやるといことになるのであるが、庶民の娘では割が合わない。そこで、殿様が長者のお姫様ということになる。『魚女房』の場合、お礼としてもらうのは神様の娘であるが、神様の娘も子亀を助けたことのお礼としては、相当な対価といえる。場合によってはお姫様以上かもしれない。奇病、難病などを治す方とは言えば、お姫様をもらうことが大変な名誉、出世を意味する身分でなければならない。そうすると、それは庶民ということになる。こういう訳で、類型3が多いのであろう。類型7の『魚女房』も同一線上にある。

グリム童話の『熊皮男』は、庶民と庶民の結婚の類型4で、上記の意味からすれば、例外的である。それは、まずこの話では、熊皮男が老人を助けるといっても、単に借金の肩代わりをするということであり、奇病や不治の病を治療したり、死者を蘇らせたりすることではないからである。つまり、信じられないような異常な力を発揮する異界からの贈物を使う必要は全然なく、金さえあれば比較的簡単に行うことのできる援助だからである。もっとも異界の悪魔からお金はもらってはいるが。したがって、そのような援助の対価としては、庶民で十分であり、お姫様では不自然で、不釣り合いであろう。また、老人を助ける熊皮男は、悪魔からお金がいつでも出てくる縁の上着を持っているので、つまりすでに大金持ちであるので、長者や殿様といったお金持ちのお姫さまをもらう必要はないのである。

ところで、グリム童話の『熊皮男』をお礼結婚の例として取り上げたが、それは『日本の昔ばなし』のお礼結婚とは明らかに性格が違う。グリム童話には、お姫様の大病、不治の病、尻鳴りとか長い鼻のような奇病を治したり、死者を蘇らせたりするような、離れ業をやって助け、お礼にお姫さまをもらうという、『日本の昔ばなし』に共通するお礼結婚は一つもない。つまり、グリム童話には、典型的なお礼結婚がないのである。なぜであろうか。確かなことは言えないが、篋で瀕死の病や尻鳴りを治したり、鼻伸び糸巻きで長い鼻を短くしたり、鴉から聞いた占い師まがいの治療法で難病を治したり、生き棒で死者を蘇らせたりすることは、土着の民間宗教や占い師、祈祷師、呪術師、魔術師、魔女や魔法使いのやることであり、西欧のキリスト教社会では、それ自体忌み嫌われている（民衆の間では必ずしもそうとは言えない）上に、そのような魔術で難病、奇病を治療したり、死者を蘇らせたりしたことで、感謝され、その報いとして、王さまや長者のお姫さまをもらうということ、つまり出世してハッピーエンドとなるということは、グリム兄弟の価値観はもちろんのこと、キリスト教文化とその規範に強く反するという事情があるのかもしれない。はっきり言えることは、グリム童話では、魔女、魔法使いなど、魔法をかけた者は、一つの例（『大泥棒とその師匠』— この場合は、魔法とは自己変身術と泥棒術である）を別として、無残な結末を迎える（なんの危害を加えられないことも多々ある）ことこそあれ、ハッピーエンドを迎えることは決してないということである。『大

泥棒とその師匠』ですら、雄鶏に変身した師匠を狐に変身した主人公が噛み殺し、主人公が変身術において師匠に勝利することで話が終わるのであって、魔法によってお姫様をもらったり、出世したりするという、ハッピーエンドではない。ところが、『日本の昔ばなし』では、魔術や呪術を使って、お姫様に難病、奇病を生じさせ、後でそれをまた魔術や呪術で治した者が、お礼にお姫さまをもらって出世するだけにとどまらない。『尻なりべら』や『鼻のび糸巻き』では、それを手助けしているのが神様なのである。『聴き耳』のねりやの王さまも神様と考えるとよい。つまり、お姫様の難病、奇病を治すための決定的な道具を贈っている張本人が神様なのである。また『日本の昔ばなし』では、神様と人間がさも当たり前のように自然に結婚する。まさに『魚女房』の場合がそれである。他にも『天降り乙女』や『笛吹髯』がある。しかし、グリム童話には、神様と人間の結婚は一話もない。また神様が博打をしているように、『日本の昔ばなし』の神様には人間味がある。ここに、西欧のキリスト教を主体とした文化と、仏教を中心に、神道、山岳宗教、陰陽道、修験道、民間宗教などが相互に関係し、独特の民俗宗教を作り上げてきた日本の文化との差を見て取るのは無理があるであろうか。